



TITLE:

<批評・紹介>西藏文豪古喇嘛教史
橋本光實編 蒙古喇嘛教史 外務
省調査部譯

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. <批評・紹介>西藏文豪古喇嘛教史 橋本光實編 蒙古喇嘛教史
外務省調査部譯. 東洋史研究 1941, 6(3): 238-244

ISSUE DATE:

1941-05-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/147097>

RIGHT:

批評・紹介

西藏文蒙古喇嘛教史

hJigs-med nam-nkhas mdsad-pai

Hor chos-byun

橋本光賢 編

昭和十五年十一月 蒙藏典籍刊行會
發行 定價七圓

蒙古喇嘛教史

外務省調査部譯

昭和十五年十二月 生活社刊行
菊版四三〇頁 定價四圓五拾錢

著者 hJigs-med nam-nkha の經歷に就いては本書の後尾に付されたる自傳の如きもの以外にはその材料は見出されないであらうと思ふが、兎に角東部西藏系のラマである事だけは確實である。本書西藏文を讀むと西藏人の學者としては餘り明確な文章とは云ひかねるのであるが、さりとて蒙古人とまでは考へる必要もないであらう。本書はその後序に見える如く版本として世に行はれ、例の Schiefner 手抄本も Petersburg の Museum にある木版本によつたものである。所が現在の版本は到底我々の目には觸れ難く、Schiefner 本も甚だ我々には調査する機會は少くなつて來て居る。たゞ Schiefner 本の系統を引

くと思はれる George Huith のものだけは幸にも所々の圖書館に於て見られるが是も今は圖書館に於て見られると云ふだけのことで、一般には甚だ流布の少いものである。Huith は語學の天才と稱すべく、彼の西藏語は獨學だと云はれて居るがその譯本は實に驚嘆すべきものがある。彼の研究は後世の學徒を裨益する所大であるがその翻譯は語法の全く異つた獨逸文である爲かなり無理な所があり、又概念の一致を缺く爲、翻譯としては原西藏文の持つよさを甚だ限定されたものとして居る。尤も Huith は佛教用語については必ず梵語、西藏語を相互に對照せしめ、便宜を與へては居るが、我々としては實は此の處西藏語の原意と漢譯の對照語も欲しい所なのであり、その記述されて居る事柄についても、蒙古の古典及び彼の膨大な支那史料との對校を望む事切なるものがあつた。Huith は譯本の序文に、かゝる完全な補註を後に出版すべき事を豫告はして居るが惜むべき事にはその完成を見ないで若くして此の世を去つた。彼は誠に偉大なる學者ではあつたがさりとて彼がその第三卷を出した時に果して我々の満足すべきものが其處に提示せられたかどうかは疑はしいものとせねばならぬ。當時の狀態では、Schmidt の「蒙古源流」や D'Ohsson の「蒙古史」位が參考になる所に到底我々の望むやうな支那史料使用による精確な研究は期待出來なかつたであらう。此の點は我々日本人としてはどうして

も日本文の翻譯と決定的な補註を得たい所であつたのであるが遂にそれは我が橋本光實氏の手によつて成就されることになつたのは喜ばしい。

本書の譯述に就いて橋本氏がとつた方法は一應は認せられてよい。我々が西歐の學者に期待出来なかつた事を橋本氏は見事に克服されたのである。もとより本書は文學書ではない。江實氏が滿文蒙古源流に於て採られた譯法は本書に於ては避けらるべきである。本書は飽くまでも西藏文よりの翻譯であらねばならない。橋本氏の翻譯は此の點甚だ忠實であつて、今後何人もかゝる正確な翻譯は成し得ないであらう。但し此の事は決して積極的に蒙古源流と本書との關係を疎遠にせねばならぬ事を云ふのではない。否寧ろ兩者の關係は本書後尾に有力なる參考書として Se-chen-Sa-nah-thab-cis mdsad-pai rgyal-brgyud-kyi gtan me-tog-gi-tshoms-mthob-ba don-idan を擧げて居るのでも分る。是が現在我々の見る「蒙古源流」である事は諸家の説の一致した所であり、事實此の兩者は相互に出入する所があるのである。

例へば、成吉斯汗が Tangut の Sidurgu kagan を討伐せし時の有様は Alan tobci (外務省版 p. 33) 及び蒙古源流 (Schmidt. p. 101. 江氏 p. 63) に見えて居るが、それは成吉斯汗が此の汗を殺しその妃 Kūlbjeln goa を娶つたが妃はそ

れを悲み河に身を投じて死したと云ふ事になつて居る。所が本書 Hor chos-byun (p. 26 譯本 p. 33) では成吉斯汗は Me-nag の第九王 rdo-rje-dpal 蒙古名 Shi-tur-gwo thul-gen ha-kan なる賢者 tēn trah-yes (又はその部下の賢者、この所西藏文はいづれにも取れる) を招請し多數の民衆を麾下に攝めたが、此の賢者の妃 Gur-bul-cen gwo は聖王に害意ありて日を過し「ハボトハサルを治罰せしを我子等歡ばざるが故に惡し」と云つて成吉斯汗を害はんとして居たが終に害ひ得ず投水した事を云つて居る。即ち Alan tobci 及び蒙古源流等は成吉斯汗の華々しい勝利と Sidurgu kagan の敗死とを對照的に記して居、屈辱せる王妃の悼ましい最後を以て成吉斯汗の大成功を傳へて居るのであるが、Hor chos-byun の方では Shi-tur-gwo ha-kan は賢者(部下の賢者とすれば此の可汗は彼等を率ゐて降服した事になる)であり、殺されたことは記さず、然して妙な事には妃はハボトハサル of 故に成吉斯汗を怨んで殺意を含んで居たと云ふのである。後者の文は如何にしても理解し難いものがある。ハボトハサルの名は Shi-tur-gwo ha-kan に置き換へられねばならぬ、ハボトハサルの名が出て來たのは源流等に此の Tangut 征伐の直前に彼と成吉斯汗との間に起つた紛争を述べて居る所からして誤つて記したのであらう。p. 13-med nam-mkha は bla-bran 附近の出身であるから古の me-nag

の地の人である。自らの故郷の事を記すのに源流の記載を回避したと云ふ事は考へられてよいと思ふ。

此等の事は源流等の蒙古史料が此の書では公然たる史料として用ひられ乍ら正確に傳へられて居ぬ點であるが、逆に蒙古史料が此の書よりして訂正すべき所がないであらうか。Altan Tobčiの事は暫くおき蒙古源流を取り上げて見る。蒙古源流と云へば普通 Schmidt 本を用ひるのであるが、これはテキストとしては決して良好なるものではない。Haenisch 氏は蒙古の王名を Comboer 本 Altan tobči と Schmidt 本蒙古源流及び此の Hor chos-byun の三書に比べて對照し Altan tobči と Hor chos-byun は甚だよく一致し、それは元朝秘史のそれにも一致するのび、Schmidt 本は此等と一致せざる所多く而も多くの誤謬と改竄を経て居る事を確めた。又陳寅恪氏や我が石濱先生等もそれ／＼實例を擧げて Schmidt 本のテキストとして劣る事を示して居られる。即ち Hor chos-byun が蒙古源流を参照したと云ふ其の源流は極めて正しい、Urtis に近いものであつて Schmidt 本より、より正しい形のものであつた事が推定せられるのである。この事は此の書が蒙古源流等よりは新しいものであるに拘はらず史料として甚だ重要な意味を持つ事を思はしめる。一例を擧げよう。Schmidt 本 p. 290 永樂帝の事蹟の所に次の記載がある。

Karma yin tehtün telen ireksen rolhai dorji saskiya yin
yeke kiltigentü dancan čorji saskiya yin yeke asaranggoi
bancan čorji gorbagola yi tertii tgerer jaiju.

Schmidt 本は「
gleich nach seiner Thronbesteigung berief er den wahr-

haft-erschiedenen Rolhai Dordschi der Garma den Jek
Kiltigentü Dantsan Tsordschi der Säkji und den Jek
Assaranggoi bantsan Tsordschi der Säkji.

よつて yeke kiltigentü dancan čorji へ yeke asaranggoi
bancan čorji へは其のキレ固有名詞的に音譯して居ながら
tehtün telen ireksen rolhai dorji へ wahrhaft erschienen Rolhai
Dordschi へは居るのは妥當を缺いた取扱と云はねばならぬ。
これはやはり漢文源流に「特衰齊榜伊喀克森囉勒貝多爾濟」と
ある如く固有名詞的に譯すべきであらう。尤も tehtün telen
ireksen へ wahrhaft-erschiedenen なる意がなこのでなうが、
これは Sanskrit の tathagata 西藏語の De-bshin-gyegs-pa の
意に取るべきであらう。即ち明史明實錄等に記されたる哈立麻
の稱號如來大寶法王の「如來」に當るものと考へられる。かく
して始めて他の併記された二法王の名稱とも均衡が取れる事にな
るのである。所が此の Rolhai dorji 即ち西藏語の Rol-pai-
rdo-rje は Hor chos-byun には Kar-na-pa の第四代にあつた

り、一三四〇—一三八三年存世の轉生者であつて元の順帝の朝廷に出入はして居るが明の太祖の代に歿して居る。Hor chos-byun では永樂帝の時代の kar-ma は De-bshin-ggegs-pa であり第五代に當つて居る。(譯本 p. 157. 藏文 p. 154) dPag-bstan-jon-bzani 及び Klon-rdol-gsun-ibum 等西藏史料は皆之と同じである。此の事は Hor chos-byun が源流とは又別に西藏史料を諸種參考にして居る事を示して居る。源流と本書といづれの記載が正しいかは積極的には論斷は出来ない。しかし Kar-ma Bakschi 以來 Kar-ma-pa の事に就いて何等の記載を爲さず突然永樂帝時代になつて再び此の派の事を書き出した源流より Hor chos-byun の順序立つた記載の方がより眞實性があるやうに思はれる。西藏史料が之と一致するのも參考になる。恐らくサナンセチエンは永樂帝と關係ありし第五代の Kar-ma De-bshin-ggegs-pa の名と第四代の Kar-ma rol-pai-rdor-je の固有的稱號たる reñun cilen ireksen とが同義語なるを以て混同してかゝる誤を犯したものと考へられるのである。かくして我々は逆に少くとも Schmidt 本の源流の誤を本書によつて正すと云ふ事が出来るわけである。此の點についても先づ本書の價值はかなり大きなことが認められるのである。

更に之を一つの成書として眺めて見よう。此の書が其の史料として使用したものは橋本氏が譯本の解題に種々掲出されて居

るが其等は sDe-bher-shon-po 等皆西藏文獻に於て重要なものばかりである。Bu-ston にはじまり sDe-bshon. dPag-bsam と來た歴史の系統は本書の成立によつてラマ教蒙古傳播の現勢まで到達して居る。名は Hor chos-byun ながら實は前代の stam-lor-gyus. gsun-ibum. chos-byun 總てが此處に集大成されて居り、地域的には印度より西藏、支那、蒙古へと擴がつて居る。しかも文中の外國語は梵語は云ふに及ばず蒙古語、支那語にわたり、讀者を悩ます事甚だしい。譯者橋本氏は此の點に就いても堂々たる業績を我々の前に呈示して居られる。が尙その中には再考を要するものが少くないやうにも思はれる。次に若干其等を記して見よう。

卷頭外務省調査部の序文に Köppen. Waddell が紹介されて居るが Schulemann の die Geschichte der Dalai-lamas 1991. が落ちて居る。名はダライラマの歴史であるが勿論七八世紀の頃の事から述べられて居る最も進んだ研究である。渡邊海旭師や岩井大慧師は支那史料が參考されて居る事を注意されて居るが、自分の見る所では Rockhill の衛藏圖識と Bushell の新舊唐書の翻譯だけである。その使ひ方も感心しない點がある。但し我が寺本、河口の諸氏が入藏活動した事を記してあるのは此の書だけであつて其の點注目すべきであらう。

テキスト二頁の第一行は一頁の最後の行と全く重複して居る

どちらか不要であらう。

譯本八頁、ガータの前の「そは文珠根本祕經に説けるが如し」
「祕經に」で切り、後文は九頁の第二ガータの後に來るべきである。

同じく一〇頁第一行目に「文成公主 (Klung-cu)」とあるがテキストには文成の語はない。Klung-cu はテキストにもさう記されて居るが、フート本テキストは明かに Kluṅ-cu である。テキスト二八頁の Se-chen Klung-cu も同様誤である。譯本三四頁を見ると、これは正しくセチェン・クーンチュと讀んである。

同じく一〇頁の七行目に Pan-grub を「林語學者」として居るが再考の餘地はないものであらうか。

同じく一八頁註(6)に「Jeke-Nidun 源流には Nge-Nidun に作る」とあるが何れが正しいかは石濱先生の「尼格尼敦考」(東洋史研究四・二)を参照されたい。小論文ら本書のテキスト的價值を定める重要な研究である。

同じく一五頁後より四行目「かくて彼女は」は「いづれにてもあれ彼によりて」であらう。

同じく二八頁終より二行目「印度の佛法」は「支那の佛法」であらう。さなくんば印度で大明洪福の支那名を貰つたことになる。テキストは rgyaṅ-chos-lugs である。フート本も同じである。

同じく三七頁註(28)角端に就いて「實錄を見よ」とあるが何の實錄であらうか。

同じく四〇頁七行目「衣と麥と」とあるがテキストには rdo-dan ras-dan とある。ras は恐らく bras ではなからうか。

同じく四三頁後から三行目の Khem-khem-che 是 Kemkhem-joutes であらう。

同じく四七頁「秦定帝は二十九歳で崩せられたり」とあるが二十六歳の誤であらう。

同じく四八頁ガータの前の「辯論術に通達せり」は sgyun-thabs-la mkhas-pa であるから「術策にたけたり」であらう。

同じく五四頁最後の行に「六年を経過せり」とあるが「七年」であらう。

同じく一一九頁「白馬寺を主とせる七大伽藍と妃の三大伽藍とを建立したり」とあるが原文は Paṅ-ma-zis gts'o-baḥi lha-khan bdun daiḥ bṣun-maḥi lha-khan gsum bṣheḥs ṅgeḥs gts'o-ba なる形は西藏語としてあり得ないから gts'o-bo を正形とすべく rten-gyi gts'o-bo の意に解したい。bṣun-ma は譯者は bṣun-mo の意に取つて居るが之は原典のまゝでよい。「白馬寺(等)僧の七大伽藍と、尼僧の三大伽藍」であらう。同じく二〇一頁後から二行目 dge-'dan をガンデンと讀んで居るがゲーデンを可とするであらう。いづれは今の dGaḥ-'dan

には相違ない。

同じく二〇八頁 Byams-chen chos-rje については于道泉氏の研究あり、蔡元培氏の六十五歳記念論文集中に收められて居る。明史明實錄の釋迦也失は之にあたる。

尙此の他細い事になれば際限ないが共通して氣のついた事は *hidu* を殆ど「アムド」として居る事、これは「ドウ」でよい。明代記録の朶甘の朶がこれであることは小生が會て述べた事がある。 *lha-tan* を「ラテン」とするがこれは *lha-tan* の別名である筈である。又西藏語の名詞を國字で音譯するのは仲々困難が伴ふものであるが本書は蒙古地方の西藏語の發音と西部西藏のそれとが混淆して居るやうに見える。煩雜を避ける爲一々例示はしないが、別にラッサ方言を標準とせねばならぬと云ふのではない。統一を取つて欲しいのである。 *Sum-bha mkhan-po* を「スンバハンポ」と讀む等は甚だしい蒙古訛である。 *Sum-bha* 等も地名であるから *Sum-pa* に相違なく、蒙古發音がそのまゝ寫されて *Sum-bha* となつて居るのである。 *Das dPaag-bram* も *Sum-pa* と記して居る。全體的に見て未だ支那史料との對校は完全とは云へない。元史、明史、明實錄、清朝實錄等當然使はるべきものが使はれて居ないのは如何なる理由であらうか。特に明以後に於て此の缺陷は目立つやうに感ぜられる。或は「之を現代史學に照して批判すれば間然する所少くない」

爲に徹底したクリティクは避けられたのかも知れないが西藏蒙古の史書で間然する所少いものは甚だ稀な筈であるし、歴史的事實と認めたい點があればあるでよいのではないか。歴史的事實ならざる事を證明するだけでも立派な研究である。蒙古の王統を印度西藏に起原を求める等はいづれはラマ僧の作爲した事には相違ないが、さう云ふ作爲そのものに蒙古的なもの或はラマ教的なものが存在する事を思はしめられる。歴史觀念の發達した支那人の史料と種々對校する時、本書における眞實なるものと眞實ならざるものとの區別は或る程度まで成功する筈である。眞實なるものを抽出したあとに眞實ならざるものが残らうが、實はその眞實ならざるものこそ眞實なるものに劣らず重要なのであつて、そこにはじめて蒙古西藏的なものを感じ得るのである。クリティクの結論はおそらく本書は嚴密な意味における歴史の書ではないと云ふ事に落ちて來るであらう。この事は本書の價值を脅かすもののやうに見える。しかし私は否と答へたい。そこには西藏蒙古の法統の汲めどもつきせぬ泉がある。いはゞ彼等ラマ教徒の現在の「在り方」を説明する爲に時間的に蓄積された知識が整然と記述され彼等が如何に彼等の宗教を考へて居るかを明かにされて居るのである。更に言葉を換へて云ふならば本書は彼等の間に於ける傳承 tradition の集大成なのである。history とか Geschichte とか云ふ言葉は彼

等にはない。最も重要視されるのが chos-byun であり、それは bDe-ge-gi-bstan-pahi dam-pa-li-chos ji-lar byuh-bah-i-shul brad-pa なのである。本書の価値はかゝる點より出發して更めて見なければならぬであらう。支那の研究には支那の資料が使はれて居る。而してそれは支那風の讀み方に従ふ事が要請されて居る。同様にラマ教研究には西藏語の文獻が用ひられそれ自身の讀み方が行はれなければならない。橋本氏の研究はかゝる意味に於ても甚だ正統的な行き方であり、ラマ教研

究に偉大なる第一歩を踏み出されたものと云つてよい。氏の極めてつましやかな記述にも似ず本書は今後斯學の方面に於て燦然たる光を放つであらう。

以上長々と雜言に連ぬるに妄評を以てしたが、意とする所は本書の價值と橋本氏の偉業を紹介したいが爲であつた。後學禮を失した點も少くない。氏の寛恕を請ふ次第である。

〔佐藤長〕

劉岳申の申齋集及び 文丞相傳に就いて

劉岳申は吉水の人（江西省吉水縣）、字を高仲、號を申齋といひ、その生卒年代は之を明瞭にし得ないが、元史儒學傳の彼の附傳に「其文學與〔劉〕誦（一二六八一三五〇）齊名。」とあり、江西通志に「甚爲吳澄（一二四七一—一三三一）虞集（一二七二—一三四八）所推重。」と見えるにより、その生存年代を大體察知し得よう。彼は吳澄の推薦により、遼陽儒學副提舉に召されたが就任せず、後泰州州判を授けられて致仕した人であり。その撰述に係るものは

左に簡述する 申齋集十五卷・文丞相傳（文信國公傳）一卷の外に至正重修廟學記がある。

申齋集は、廬陵の人である門人蕭洵の編輯する所で、茶陵州の人李祁が序文を爲り、元季嘗て剗剗に付せられたが、兵燹を経ること久しく元詩選には收載せられてゐない。江西通志も亦岳申の文集は今已に傳はらずと謂つてゐるが今は鈔本十卷が僅かに存してゐるので稀覯本といへるのである。岳申の文は韓愈蘇軾を宗としてゐる故に「其氣骨道上。無南宋卑冗之習」であり豫章人物志には「其文辭簡約峻潔」との評を下してゐるが、殆ど虚語ではない。

文集中の碑誌の作や居什の四五に至つては尤も史實を考證するに根據となるものであり、文丞相傳は宋史のそれに比して詳細を極めてゐる。（四庫提要）次に文丞相傳に就いていふと、これは元の順帝の元統元年（一三三三）丞相の孫富が梓行し湯陰の人許有壬之が序を爲り、明初樂平の人夏伯時亦版に鈔んでより、該傳は天下に盛行したのである。明初郷土の後輩胡度が該傳を批評して「大要其去丞相未遠。郷邦遺老猶有存者。得於見聞爲多。又必參諸丞相年譜及指南錄諸編。故事蹟覈實。可徵。」と述べてゐる。（文山全集）

〔田中整治〕